

第1200号記念特集を終えて

副会長 藤原 秀俊

北海道医報は昭和35年に創刊され、この度、1200号の発行を迎えた。先人の医師会役員や会員の皆様、医療を取り巻く情勢を分かりやすく会員の皆様に伝達されてきたことに敬意を表したい。2003年4月（北海道医報第1015号）に長きにわたり裏表紙のコラムを担当されてきた西信博先生の最後の内視鏡が掲載されている。それによると、このコラムは、最初は「編集後記」次に「EKG」「反射鏡」と経て、1977年から「内視鏡」となった、と記載されている。2003年4月に西信博広報部長の後を、現在日本医師会副会長の中川俊男先生が引き継いだ。中川部長は広報部を情報広報部に名称変更、さらに2005年裏表紙を「季節風」と命名、2006年からは医報をB5版からA4版に変更し、現在に至っている。西・中川両先生は、北海道医師会の広報に関しても、多大な貢献をされた。2006年4月からは、藤井美穂先生が部長となり、2007年4月から私藤原が、2009年4月からは山科賢児先生が部長となり、現在活躍中である。

この度の第1200号記念特集として、9月号は「マスメディアに映る北海道の医療」を全国紙・地方紙と道内テレビ局の方々に寄稿していただいた。それぞれのお立場から、医師会に対する期待や現場からの提案を頂いている。10月号は「北海道の医療の展望と課題」を道内臨床研修病院の方々に、現状と課題を頂いた。普段いろいろなところでお会いすることがあり、それぞれのお立場からご意見を伺っていたが、この度のように詳細にわたりそのお考えを伺うことがなかったので、大変良い企画であったと思う。11月号は「北海道の医療の現実と課題—医療現場からの声—」として、医療現場からそれぞれ執筆していただいた。大変参考になり、また今後の方向性について貴重な提案を頂いた。北海道医報は元々、秀逸な文章が非常に多い。またこの度のような特集号では読み応えのある論文が多く、北海道医師会にとっても、また会員の皆様にとっても大変有意義なものと思われる。

昭和60年の第一次医療法改正から始まり、平成4年、平成9年、平成12年、平成18年と医療法改正が行われた。その後平成21年には民主党への政権交代

があり、平成24年社会保障・税一体改革大綱が出され、さらに同年再度自公政権が誕生した。平成25年には社会保障制度改革国民会議より、医療・介護提供体制の改革と地域包括ケアシステムの構築が提唱され、同年12プログラム法が成立し、平成26年「持続可能な社会保障制度の確立を図るための改革の推進に関する法律」（医療介護総合確保推進法）が成立した。これが第6次医療法改正であった。その後平成27年第7次、平成29年第8次と近年は1年ごとに矢継ぎ早に医療法が改正されている。また平成16年には新臨床研修医制度が始まり、地域医療の崩壊に繋がったとされている。今後は来年10月に消費税率10%への増税が予定されており、医療界のみならず社会全体に暗雲が漂っている。度重なる医療法改正と制度改革からは厚労省の焦燥が感じられる。しかし、このような中でも我々医師は「国民のために」より良い医療を提供しなければならない。そのためには、しっかり情報を把握しそれを分析することにより、対策を講ずる必要がある。北海道医報は会員の皆様に、正確な情報を発信し、会員の皆様と情報を共有し、団結して難題に取り組んでいきたい。今後とも会員の皆様のご協力とご支援をお願いしたい。